

有限会社くらぶ・ふあーまー 代表取締役

金久光男さん

明日へ向かって駆ける

農業法人の経営者は語る

丹後半島のほぼ中心に位置する京丹後市弥栄町。農業生産法人「有限会社くらぶ・ふあーまー」は、同町南の溝谷川沿いの山間に広がる農地35畝のうち、10畝で水稻を中心に栽培している。

代表取締役の金久光男さん(74)は「小規模な農家が多く、個別に農業機械を持って農業を行う人が多かったが、高齢化や担い手不足が進んでいる。農作業の委託を望む農家が増えてきたため、12人の仲間です法人を立ち上げた」と話す。

「このまま個別に小規模な農業をやっていたら、今後この地域の農業が続かない。法人化を機に、大型のトラクターなどを購入し、

作業を効率化した。JAや普及センターの指導を受け、できることは何でもやってきた」と、1998年の設立から20年目を迎えた現在までを振り返る。

同社は、丹後地域でいち早く設立。大型のトラクターや田植え機を導入し、3畝の農地で水稻、ハウス5棟でみず菜などの野菜生産を始めた。その後は農地を10畝に、ハウスも8棟に拡大。水稻育苗や

農作業受託に取り組み、トウガラシや「ズビいも」、ブロッコリーなど露地野菜の種類を増やし、JAの直売所での販売してきた。

しかし、組合員が4人が相次いで亡くなり労働力が低下。「露地やハウスでの野菜栽培をやめざるを得ない状況だった」と語る。そこで、

5年前から水稻育苗、米栽培、農作業受託に絞った取り組みに切り替えた。生産した「丹後コシヒカリ」はJAに出荷する他、「丹後の米が食べたい」と、全国各地から注文が入るなど好評だ。

高齢化やメンバーの減少で後継者の確保が急務だ。今年、仕事を退職した64歳の男性が、先祖からの農地を守りたいとの思いで法人の組合員となった。今後、法人の



▲金久光男さん(左)と法人の中核を担う森戸浅雄さん(中)、金久保徳さん(右)

先導役として期待される。

また、府の国営開発農地で大規模農業経営を目指す若者が集う「丹後農業実践型学舎」に、法人のハウス2棟を貸し出している。研修生が野菜類の実習を行っていることから「これを機に、若者がこの地域に移住してくればうれしい」と金久さんは期待する。

「地域農業の受け皿として、今後も法人を維持し、志を引き継いでくれる若手につないでいきたい。水稻に力を注いでいるので、もっともっと丹後のおいしい米を、多くの人に味わってほしい。そのためには、おいしい米作りを頑張っていく」と金久さんは意気込みを語る。

■法人所在地 京丹後市弥栄町溝谷5580の3(電)07772(65)3443。

■法人概要 1998年2月設立。役員1人、監事1人、組合員5人、パートタイマー2人(農繁期)。経営面積 10畝(「コシヒカリ」7畝、加工用米「京の輝き」3畝)、農作業受託3畝、育苗用ハウス5棟。農業機械 トラクター2台、コンバイン1台、田植え機1台、米乾燥機3台。

丹後の米作り続ける